

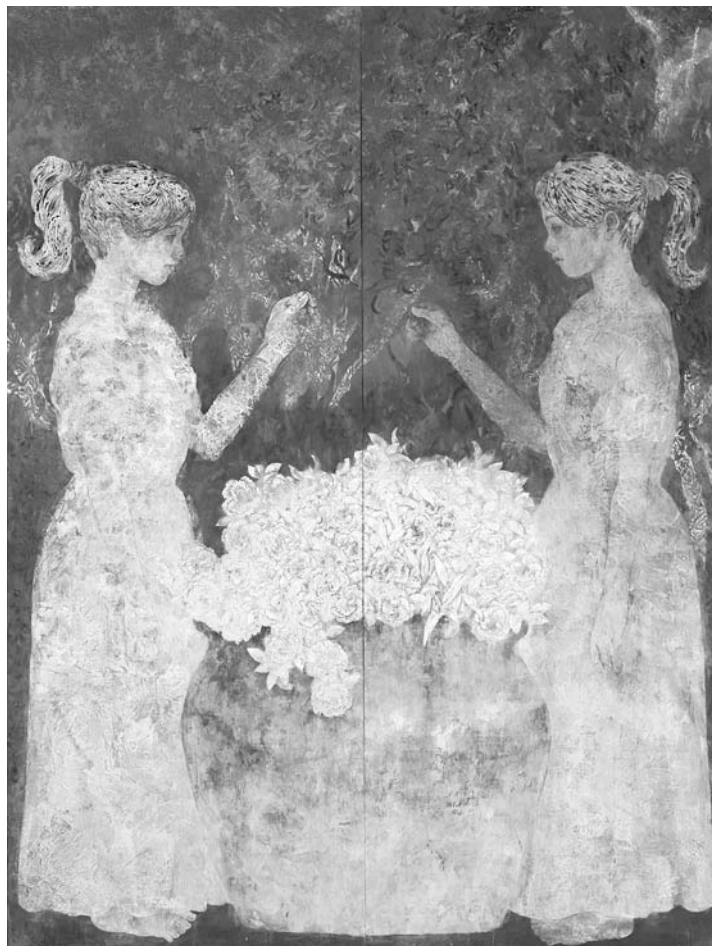


佐藤加奈 《沈黙のとき》 麻紙、岩絵具 2590 × 1940 mm

《沈黙のとき》
日常生活を通した「沈黙」の自己表現をめぐって
《Moment of Silence》
On the Self-Search of 'Silence' through Daily Life

佐藤 加奈
Kana SATO

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻
Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University



《沈黙のとき》
麻紙、岩絵具 2590 × 1940 mm

本稿は、日常生活と制作の関係を振り返ることで、それがどのような工程で作品に発展しているのか考察している。加えて、修了作《沈黙のとき》と「沈黙」の関係について述べる。私の制作の入口は、日常生活で目にしたもの、更にそこから感じたものが現実の風景とは形を変えて現れた時である。そして、日常に溢れる一端を現実にはないイメージとして視覚化したい願望が絵を描く動機となっている。高校生の頃から、イメージをクロッキー帳に描き溜めてきた。しかし、作品へと展開する事を前提に描いていないため、実際の作品制作へ進むものは僅かである。その後、イメージを複合させる制作プロセスを経て作品へと展開するのが私の制作プロセスである。本修了作《沈黙のとき》では、表現と具体的に描いた対象が何を示しているのか自問自答を繰り返しおこなう事で自分なりの解釈に至っている。

第一章では、自分自身の生活と制作がどのように関係して制作へと進むのか、その経緯と動機を具体的に述べている。私は、日々の制作の合間に散歩をする事で、何気なく歩いた先にある感動や驚きが制作の糧となり作品へと展開している。また、作品制作の際に自分自身が思い描いたイメージがどのように変化をしながら具体的な形になるのか、過去作品を振り返りながら説明している。

第二章では、修了作《沈黙のとき》について述べている。制作の入口は日常生活の断片的なイメージであるが、それは自分自身の中で変化し違う世界として思い描いた世界となる。制作工程の中でそのイメージについて自問自答を繰り返しながら作品へと具体化していく。本章ではそのイメージがどのようにして表現へと昇華したかを具体的にみていき、最後、本修了制作において題名を「沈黙」にした理由についても自分なりの説明を述べている。

私にとって、制作活動を通して自然や他者、自己と向き合う事が次の創作へ繋がると考えている。加えて、ただの感情のはけ口ではなく、鑑賞者に時を忘れて楽しんでもらうことが目指すところであり、私にとって救いでもある。本修了制作《沈黙のとき》は改めてその事を考える好機となったと言える。